

御糸織

松阪商人が江戸時代に広めた「松阪もめん」は、縦縞^{たてしま}の柄が特徴です。それまでの織物^{こんいろ}は紺色だけで、縦縞は粋が誇りの江戸っ子の気風に合い、安くて丈夫なため、一躍大流行しました。歌舞伎役者が縞^{しま}の着物を着ることを今でも「マツサカを着る」と言うほど、縞柄といえば松阪もめんが代表的な存在でした。

この松阪もめん、実は現在も明和町で製造されており、「御糸織」の名称で受け継がれています。明和町の「御糸織物株式会社」では植物の藍で糸を藍色に染めて、機械で反物^{たんもの}を織るという、全国でも珍しい一貫体制で生産しています。

染色し天日干しを行い、美しい藍色の糸を作りだすのはまさに職人技。単に“藍色”“縦縞”といっても、色の濃淡や線の太さなど、デザインのバリエーションはとっても豊富です。



染料の発酵^{はつこう}状態を確認しながら長年の経験で染める回数や時間を調整します



晴れた日には染められたたくさんの糸が干されています



染めの濃さが違う糸を、並べ方や幅を変えることでさまざまな柄が生まれます

キーワード：伝統産業、下御糸、御糸織、紡織、織物、御糸織物株式会社